

『西遊記』の夢
中谷宇吉郎

第1幕

子供の頃読んだ本の中で、一番印象に残っているのは、『西遊記』である。

もう三十年も前の話であり、特に私たちの育った北陸の片田舎には、その頃は子供のための本などというものはなかった。

子供たちは、大人の読み古した講談本などを、親に叱《しか》られながら、こっそり読んでいた。その頃「盛《さかん》」に出ていた小波《さざなみ》氏の「世界お伽噺《とぎばなし》」のようなものも滅多に手に入らなかった。

あの一冊十「銭《せん》」の本は、たしか全部で百冊あったはずである。もう何回となく読みかえたそのうちの一冊の末尾には、百冊の題目がずらりと並んでいた。その題目の一つ一つが少年の心には、あらゆる空想の種であった。これらの百冊の題目は、見開き二「頁《ページ》」にぎっしり詰《つま》っていた。その二頁に、私たちは、いつまでもあかず見入っていた。気に入ったお馴染《なじみ》の題目のいくつかは、その紙面からずっと浮き出して見えた。そしてその活字の蔭《かげ》に、古い城だの、碧《あお》い湖だのの姿が揺曳《ようえい》《ようえい》していた。

そういう頃に、私は帝国文庫の『西遊記』を見つけた。私は町の小学校へはいるために、小学一年の時から町へあずけられていた。その家は旧「士族《しぞく》」の旧《ふる》い家柄の家であった。そこには帝国文庫だの、それに類した本が十冊近くもあって、それがあこがれの的であった。

第2幕

背中に金《きん》の文字がはいっているあの厚い本は、中が小さい字で一杯に埋っていて、あれならばいくら読んでもおしまいにはならないように見えた。それに立派な絵も沢山はいっていた。

漸《ようや》く振仮名《ふりがな》を頼りに読めるようになった時に、最初にとつづいたのが『西遊記』であった。この頃になって、久しぶりで手にしてみると、劈頭《へきとう》から、南瞻部洲《なんせんぶしゅう》とか、傲来《ごうらい》国とかいうようなむつかしい字が一杯出て来る。こういう画《かく》の多い字が一杯並んで、字づらが薄黒く見えるような頁が、何か変化《へんげ》と神秘の国の扉のように、幼い心をそそった。

面白さは無類であった。学校から帰ると、鞆《かばん》を放り出して、古雑誌だの反故《ほご》だののうず高くつまれた小さい机の上で『西遊記』に魂をうばわれて、夕暮の時をすごした。屋でも少し薄暗い四畳半の片隅には、夕闇《ゆうやみ》がすぐ訪れた。その訪れにつれて、本を片手にだんだん窓際《まどぎわ》に移って行った。ふと顔をあげると、疲れた眼に、すぐ前の孟宗簍《もうそうやぶ》の緑が鮮《あざや》かにうつった。

コメントの追加 [原 1]: 問題

①<文頭の「中谷宇吉郎」の前に4分の1文字分のスペースを挿入してください。>

②<2 ページ目の「第3幕」の中の不要な行、タブ、スペースを削除してください。>

③<ページの下部に「番号のみ2」を挿入してください。>

④<文書のプロパティの状態に「本番用」と入力してください。>

⑤<文書に「西遊記」という名前を付けて、MOSword2019 実習用ファイルにPDF ファイルとして保存してください。発行後にファイルを開いて確認します。>

仏教の寓意譚《ぐういたん》であるという『西遊記』が、これほど魅魔的《みまてき》に感ぜられたのは、雰囲気のせいもあった。その頃に加賀《かが》の旧い家には、まだ一向一揆《いっこういっき》時代の仏教の匂《にお》いが幾分残っていた。

一番奥の六畳|間《ま》が、仏壇の間《ま》になっていた。仏壇の間は昼でも薄暗かった。家に不相応な大きい仏壇は旧くすすけていて、燈明《とうみょう》の灯《ひ》がゆるくゆれると、いぶし金の内陣が、ゆらゆらと光って見えた。

第3幕

その家の老母は、仏壇の前にきちんと坐《すわ》って、朝晩お経をあげていた。そして月に二、三回もお坊さんが来て、長いお経をあげた。小学生の私もその間は必ず老母の横にきちんと坐ってお経をきいていた。そういうことも日課のうちの一つとして、家の中の人も私もちっとも変わったこととは考えていなかった。

足の痛いのを我慢しながら、じっとお経をきいていると、だんだん睡《ねむ》くなって来る。時々燈明がぼうっと明るくなると、仏壇の中の仏像だの、色々な金色《こんじき》の仏様の掛軸《かけじく》だのが、浮いて見えた。そして孫悟空《そんごくう》のいた時代がそう遠い昔とは感ぜられなかった。

太宗《たいそう》皇帝の水陸大会《だいせがき》に、玄奘法師《げんじょうほうし》の錦欄《きんらん》の袈裟《けさ》が燦然《さんぜん》と輝き、菩薩《ぼさつ》が雲に乗って天に昇ると、その雲がいつの間にか※[# 「角+力」、第3水準 1-91-90] 斗雲《きんとん》にかわって、いつか自分は水色の綿蒲団《わたぶとん》の下に蒸されるような息苦しさを感じた。そういう時には、金色の燭台《しょくだい》の一点が燈明に鋭く輝いて、その光点から金色の箭《や》が八方にさしているのを、唯一《ゆいいつ》のすがりどころとじっとみつめていた。

家の中には科学はおろか、およそ近代風の物の考え方というものは少しもなかった。本当のことを信ずるという現代の人たちには、本当でないから信ずるということまでは理解出来るであろう。しかし本当とか嘘《うそ》とかいうことと信ずることとが完全に乖離《かいり》した考え方はちょっとむづかしい。私が小学校時代を過《すご》した家には、あらゆる意味で、現代風な物の考え方というものは全然なかった。そういう所では孫悟空は、自由にその金箍棒《きんこぼう》をふるうことが出来たのである。

第4幕

小学校では、変った先生がいて、理科の時間にカントーラプラスの星雲説などを教えてくれた。今でいえば科学普及という類《たぐ》いであろうが、その先生の話を書いていると、何だか宇宙|開闢《かいびゃく》以前の夢の方が余計に聯想《れんそう》されやすかった。何もない虚空《こくう》に目に見えない力の渦巻《うずまき》だけがあって、その渦の捲《ま》き方がだんだん速くなる。するとその力が凝《こ》って物質が徐々に生れて来るような幻想

コメントの追加 [原 2]: 問題

①<文頭の「中谷宇吉郎」の前に4分の1文字分のスペースを挿入してください。>

②<2 ページ目の「第3幕」の中の不要な行、タブ、スペースを削除してください。>

③<ページの下部に「番号のみ2」を挿入してください。>

④<文書のプロパティの状態に「本番用」と入力してください。>

⑤<文書に「西遊記」という名前を付けて、MOSword2019 実習用ファイルにPDF ファイルとして保存してください。発行後にファイルを開いて確認します。>

が、いつの間にか頭の中に出来てしまった。それで折角のカントーラプラスもまた孫悟空の味方になってしまったのである。

今から考えてみれば、随分無茶な話であるが、それでも無事に中学へはいり、高等学校へ行ってピアノなどというものの実物を見るようになっては、さすがに『西遊記』の世界からは次第に離れて行った。そしてその反動かどうかは分らないが、物理学などを専攻することになってしまった。

第5幕

その後は、当然のことながら、長い間『西遊記』とは縁のない生活をしていた。ところが二年ほど前に思わぬところで、ひょっくり本物の八戒《はっかい》に出会ったのはちょっと驚いた。それは正《まさ》しく本物の八戒《はっかい》と言ってよいものである。

紀元二千六百年記念に出版された『西域画聚成《せいいきがしゅうせい》』を見ているうちのことであった。燉煌《とんこう》出土の降魔図《ごうまず》の中に八戒がいたのである。中央の岩上に結跏趺坐《けっかふざ》した釈尊《しゃくそん》の周囲に、怪奇な魔衆が群り集っている、空想の限りをつくした絵である。その中に魔衆の一人として、長い嘴《くちばし》を突き出した八戒が、熊手《くまで》をふりあげて、強くないくせに威張った顔をして立っていた。八戒のくせに裾長《すそなが》の着物を着て、金の冠《かんか》をかぶって、不器用に熊手を振りかぶっている。子供の頃から頭の中にある、悪いことばかりしていて、その割に悪《にく》めない八戒の姿そのままがひょっくり出て来たので、大変なつかしかった。

この絵は宋初《そうしよ》のものとしてされているので、本当の玄奘三蔵《げんじょうさんぞう》法師が、唐《とう》の太宗《たいそう》の貞観《じょうがん》三年に長安《ちょうあん》の都を辞して、遙々《はるばる》印度への旅についた頃から見ると、三百年くらい後に描かれたことになる。しかし『西遊記』の書かれたと推定されている宋末・元初《げんしよ》の頃から見ると、ずっと旧《ふる》いものである。古来白骨人の収《おさ》むる無《な》しとうたわれた青海《せいかい》のほとりに、その頃丁度八戒などもいたのであろう。審美書院《しんびしよいん》の自慢の木版摺《もくはんずり》の色でみると、千年の間土に埋《うも》れていて、今また陽光を浴びた八戒は、鮮《あざや》かな朱《しゅ》と黄色との着物を着て、一、二年前に描かれたような色彩のまま保存されていたのである。

八戒の出現と前後して、スタインの『中央アジア踏査記《とうさき》』を読むに到《いた》って、私の『西遊記』の夢は益々本物になって来た。スタインの専門的な探検報告や燉煌絵画のような浩瀚《こうかん》なものには手が出ないが、この『踏査記』のような手軽なものに、彼の全仕事《しごと》が纏《まと》められているのは、大変有難かった。それに風間《かざま》氏の重厚な訳もよかった。

スタインは一九〇〇年から一九一六年にわたって、前後三回支那西域タクラマカンの荒野に発掘の旅をつづけた。それは古代のいわゆる絹路《シルクロード》を確かめ、また玄奘法師やマルコ・ポーロの通った道を、現在の地図の上に辿《たど》るのが主な目的であった。

コメントの追加 [原 3]: 問題

①<文頭の「中谷宇吉郎」の前に4分の1文字分のスペースを挿入してください。>

②<2ページ目の「第3幕」の中の不要な行、タブ、スペースを削除してください。>

③<ページの下部に「番号のみ2」を挿入してください。>

④<文書のプロパティの状態に「本番用」と入力してください。>

⑤<文書に「西遊記」という名前を付けて、MOSword2019 実習用ファイルにPDFファイルとして保存してください。発行後にファイルを開いて確認します。>

支那の奥地、今 | 重慶《じゅうけい》政権が、ソ聯《れん》との連絡に懸命の努力をつくしている西北ルート土地は、カラコラムの氷河の水がとけて流れ出る僅《わず》かの流域をのぞいては、殆《ほと》んど死の世界である。玉門関《ぎょくもんかん》を越えて、太平洋の水域の勢力の限界を一步出ると、その西は遥かに世界の屋根 | 葱嶺《パミール》に至るまでのいわゆる支那トルキスタンの地方は、全くの荒蕪《こうぶ》の砂漠と、乾燥し切った岩山との境である。其処《そこ》はもはや生物の世界ではなく、暗黒な砂漠の嵐《あらし》が狂い、大塩湖《だいえんこ》の干上《ひあが》った塩床が、探險者の足を頑強に拒《こば》んでいる土地である。そして僅かばかりの人間が、砂漠の砂に埋れた廃墟《はいきょ》の古代都市のほとりに、僅かにヒマラヤの雪のとけ出た流れを汲《く》んで、辛《かろ》うじて生命を保っているところである。

千三百年の昔に三蔵法師は、こういう土地を、本当はやはり孫悟空も八戒もつれずに、一人で歩いて行ったのであろう。「葱嶺《そうれい》を逾《こ》ゆるに毒風肌を切り、飛砂 | 路《みち》を塞《ふさ》ぐ、溪間《けいかん》の懸絶《けんぜつ》するに逢《あ》へば、縄《なわ》を以て梁《はし》となし、空に梯《はしご》して進む」と当時の本にも残っているそうであるが、そういう旅であった。

第6幕

スタインの仕事は、この同じ恐ろしい土地で、三蔵法師の歩いた道を推定しながら、砂漠の中に埋れ去った廃墟を発掘して、遺跡と遺品とを探しに行くことにあった。探險家などという、豪放大胆な人が多いように一般には思われているが、スタインは全くそれと反対の性質の人ようであった。スタインの探險の成功の大半は、彼の学問に負っているようである。掘り出される紙片とか木簡《もっかん》とかに残されている文字が、スタインにはおぼろげながら、大体読めた。欧洲《おうしゅう》人にとっては恐るべき文字であるはずの古代の漢文、サンスクリット、古代印度のブラフミー文字など、そういうものまで、どうにか大体の意味が解せられた。そしてその文字によって、発掘個所の意味を推定しては、次の発掘にとりかかっているのである。

第7幕

ニヤの古址《こし》では、沢山の木簡が採集された。それは印度古代のカロンチー文字であった。そしてその書体から、それはスキタイ王朝即ち第一 | 乃至《ないし》第三世紀のものであることを知った。三蔵法師よりも四、五百年も前に使われていた木簡である、千七百年の歳月を閲《えつ》しても、乾き切った砂の中に埋れていた木簡は、特に二枚 | 重《かさな》ったまま発掘されたものなどは、内面の文字の墨色が昨日のもののように鮮《あざや》かであったそうである。

出典：青空文庫(<https://www.aozora.gr.jp/>)

コメントの追加 [原 4]: 問題

①<文頭の「中谷宇吉郎」の前に4分の1文字分のスペースを挿入してください。>

②<2 ページ目の「第3幕」の中の不要な行、タブ、スペースを削除してください。>

③<ページの下部に「番号のみ2」を挿入してください。>

④<文書のプロパティの状態に「本番用」と入力してください。>

⑤<文書に「西遊記」という名前を付けて、MOSword2019 実習用ファイルにPDFファイルとして保存してください。発行後にファイルを開いて確認します。>